

天保十四年の キャリアオーバー

五十嵐貴久

第六回

七

師走しわすに入り、寒さが厳しくなっていた。

町奉行ちやぎやうは、北も南も奉行所内に住居を構えている。江戸の治安を守る責任者として、何かあれば誰よりも早く下知げじを下す必要があるが、そのためにも職住隣接は必須だった。

「足」

寝所に入った鳥居とりいが命じると、妻の登与とよが布団に手を入れて、足をさすり始めた。

冷え性で、時に手足の先が痺しびれるほど痛み、我慢ならない時がある。だが、それにしてもこれでは妻を下女げじよ扱いしているとの同じで

あろう。

登与は何も言わず、命じられるまま従うだけである。逆らえば、何をされるかわからない、という心の臓が冷えるような怯えがあった。

鳥居耀蔵は林家の出で、鳥居家の婿養子である。本来なら三男であるため、家督を継ぐことはできなかった。

養子に迎えてくれた鳥居家に感謝するべき立場であるが、そのよ
うな考えが頭の片隅を過ったことはない。むしろ、逆である。

自分がいたからこそ、鳥居家の家名、家格が上がったと自負して
いた。

過去、鳥居家で三奉行のひとつ、町奉行に昇進した者は一人もい
ない。耀蔵の才、器量があつてこそその鳥居家である、というのもあ
ながち間違いではなかった。

望まれて婿養子になった、という経緯もあつた。登与は気立ての
いい女で、器量も良かったが、鳥居は最初から気に入らなかつた。

頭が悪い、というのがその理由である。鳥居が男色家だったため
もあつた。

夫婦仲は冷えきっており、鳥居にとって登与は下女以下の存在だ
つた。身の回りの世話をする以外、何もできない女だと思っている。

扱いがぞんざいになるのは、当然ですらあつた。

(矢部鶴松)

目を見開いたまま、名前をつぶやいた。

鶴松の養父、前南町奉行矢部定謙を讒言さだのり ざんげんによって、罷免ひめんに追いや
つたのはちょうど二年前、天保十二年（一八四二）十二月のことで
ある。

当時老中頭ろうじゆうであった水野忠邦みずのただくにの改革に反対していた定謙を解任
するため、大阪町奉行を務めていた頃の不正おとしおへいはちろう、大塩平八郎の乱への
加担、更には江戸町奉行として職務怠慢たいまんであると言いついて、偽の証
拠いせくわなまででっち上げて町奉行の職を奪い、罪人として伊勢桑名藩預か
りという厳しい処分を下した。

その三カ月後、定謙は自らの無実を訴えるために腹を切り、自害
したが、その間鳥居は鶴松と二度顔を合わせていた。一度は矢部家
改易かいえきを言い渡した時で、もう一度は定謙の死を伝えた時である。

鶴松について詳しくは聞いていなかったが、二十代後半、三十歳
になっていただろうか。やや小柄だが姿勢が良く、いかにも武家の
出という風であった。

役者のようにとまでは言わないが、目鼻立ちの整った頭の良さそう
な男だった、と鶴松の顔を思い浮かべながら、鳥居は深く息を吐い
た。

「痛いいとございましたでしょうか」

怯えたように顔を上げた登与に、手を止めるなど命じて、更に鶴松のことを考え続けた。

矢部定謙は不正の罪で罷免され、同時に旗本はたもとという身分を失った。養子である鶴松も、今は浪人ろうにんの身である。

定謙の死後、虫の知らせというべきか、鶴松のことを調べるよう配下どうしんの同心に命じていた。幕府開府以来の旗本で、三千石取りたくの大身しんだったが、改易により家屋敷も没収されていた。

浪人の身となった鶴松は、その後しばらく実家に身を寄せていたが、一年前に再び家を出て、古本の商いを始めていると報告があった。何か伝つてがあったようだが、その辺りは不明である。

特に目立つような動きをしていたわけではなかったので、監視を解いたが、蛭ひるの仁吉じんきちら目明めあかしによると、不審な様子があるという。自分の陰富かげとみに関することだと直感していたが、外れてはいないはずだった。

鶴松は養父定謙の仇を討つつもりなのだろう。そのため陰富についてすべてを調べ、百万両を奪おうとしている。

(できるはずがない)

矢部定謙は鳥居の陰富を察していた。だからこそ、鳥居は先手を打って讒言により、その職を奪った。

定謙が職を追われたため、鳥居自身が町奉行になったが、まさに

一石二鳥の妙手であった。

あの時、定謙が陰富について察してただけで、確たる証拠を握っていないことを、鳥居は知っていた。だからこそ、定謙は鳥居を糾弾きゆうだんできなかつたのである。

定謙の立場になればわかるが、老中頭の側近である鳥居を簡単には捕縛できない。確かな証拠を掴むまで、泳がせるつもりだったのだろうが、それが奴にとって命取りになった、と含み笑いが漏れた。

養子の鶴松に、定謙が鳥居の陰富について話していたとは思えない。まだ鶴松は家督相続前で、無役だった。いくら息子であっても、職務上の秘密を漏らすはずがない。

だが、鶴松は間違いなく陰富について知っている。確証はないが、確信があった。

勘の良さは人後じんごに落ちない自信がある。どのような手段を用いたかは不明だが、あの男は陰富のことを詳しく調べているに違いない。

ただし、鶴松も証拠を握っているわけではないようだ。怪しいというだけで、町奉行を訴えることはできない。

何より、町奉行を務めているのが陰富の胴元どうもとである鳥居なのだから、訴えても揉み消されるだけだ。下手をすれば養父の定謙のように、鶴松が消されてもおかしくない。それがわからないほど、馬鹿ではないだろう。

寺社による富籤興行とみくじが年内で終わることは、江戸市中の者なら誰でも知っている。富籤興行が開かれなければ、陰富は成立しない。それは鶴松も承知しているはずである。

師走には多くの寺社で富籤興行が行われるが、最も規模が大きいのは湯島千両富である。鶴松でなくても、鳥居がそれに合わせて陰富を開帳すると読むだろうし、自分もそのつもりで準備を進めていた。

だが、鶴松は確信かくしんしていても、確証かくじょうはない。そうであれば、何もできらなかつた。

鶴松は養父定謙が親しくしていた幕閣ぼっかくの有力者を知っている。彼らに訴え出ることとはできなくもないだろうが、何の証拠もないのに、鶴松の言葉だけを信じて、南町奉行所へ踏み込む者などいるはずもない。

法制上も不可能である。奉行所は独立した機関であり、幕閣、老中わかしよや若年寄わかしよのような重職に就く者でも、断わりなしに入ることは許されない。

奉行所は江戸の治安を守る唯一の公的機関である。由井正雪ゆいしょうせつの乱のように、謀反むほんが起きた場合、それに対処する最前線の指揮所は奉行所に置かれる。

当然ながら、謀反を起こす側もそれは承知している。由井正雪の

乱も、あるいは大塩平八郎の乱でも、その計画の根幹に奉行所の襲撃があった。最前線指揮所を押さえれば、指揮系統が混乱し、制圧が困難になるためである。

奉行所の独立性が高い理由はそれであり、許可がない者の出入りは厳重に禁じられている。幕府要人を装って奉行所内に入った謀反人が、中から門を開けることも有り得る。そのため、守りを固くするのは戦略上必然だった。

だからこそ奉行所が最も安全な陰富開帳の場になっていた。奉行所では、奉行がすべての権限を持っている。配下の与力よりき、同心も奉行に対しては口を出せない。

また、外部から侵入することは絶対にできないと言っている。常に門は閉ざされ、警備も厳重であり、与力、同心、目明かし、その他を含めれば、数百名が常駐している。

無理に押し入ろうとすれば、戦と同じである。そんなことをする者など、いるはずがない。

その意味で、鳥居に不安はなかった。過去もそうであったように、今回の陰富も無事に終わる。そのはずだった。

だが、矢部鶴松に不穏な動きがあるという。いったい何をするつもりなのか。

鶴松に味方する者が少なくないことは、鳥居もわかっていた。前

老中頭、水野忠邦の改革によって、多くの者が職を失ったが、その反動ということなのだろう。鶴松なら百人、あるいは数百人を集めることができるかもしれなかった。

だが、それは烏合の衆である。無力な者がただ集まっても、何が
できるわけでもない。

吉原の太夫や歌舞伎役者、咄家や読本作家たちが力を合わせたところで、奉行所に攻め入ることなどできるはずがないのである。

「痛い」

鋭い声で言うと、飛び下がった登与が畳に額をこすりつけて許しを乞うた。

「申し訳ありませんでした。気をつけますゆえ、お許しください」
もういい、と絹布団を頭から被った。足は温まっていたが、頭の中は冷めていた。

いったい鶴松は何を企んでいるのか。さまざまな想念が頭の中を巡ったが、答えは出なかった。

八

あいつは本ばかり読んでやがるな、と煙管をくゆらせながら團十郎は言った。師走に入り、十日が経っていた。

「いいじゃないの、好きで読んでるんだから」

繕つくろいものをしていたお葉ようが顔を上げた。そんなに尖とがった物言いをすることはねえだろう、と團十郎は煙を吐いた。

「悪く言ってるわけじゃねえ。感心してるんだ」

照れ笑いをお葉が浮かべた。あんたのことを言ってるんじゃないねえ、と團十郎は握った煙管を左右に振った。

「今時の旗本にしちゃあ、珍しいってこった。ただ遊び呆ぼうけている連中が多いが、鶴松は違う。ずいぶん物学びに熱心なようだな」

そういう人なんだよね、とお葉が形のいい眉ひそを顰ひそめた。

「もつとあたしらと話したり、その……もうちょっと何かあってもいいんじゃないかって思ってるんだけど」

顎あごをしゃくるようにして表に出ると、お葉がついてきた。

「おお寒い。もう師走なんだね」

昼過ぎだったが、日陰には霜しもがまだ残っている。草履ぞうりを履いた足で踏むと、沈み込むような感触があった。

「お葉さん、あんたが鶴松のことを好いているのはわかってる。いい、何も言うな。面倒臭え」

面倒めんどうって何だい、とお葉が團十郎の肩を小突いた。

「そんなことはありません。鶴松さんは七代目と違って真面目な人なんだから、惚ほれたの腫はれたの、そんなことを言うような……」

照れんなよ、と團十郎は肩を小突き返した。

「別にいいじゃねえか。おれに言わせりや似合いの二人だよ。それで、鶴松の方はどうなんだ？」

あんなに鈍い男、見たことないとお葉が足元の小石を蹴った。

「どうなんだろう。ねえ、七代目、どう思う？ あたしって、こういう質たちでしょ？ 男勝りだし、言葉遣いも乱暴だし、やっぱりそんな女は好かれないのかな」

女臭い顔になりやがった、と團十郎はお葉の頭を軽く叩いた。

「そりや好みつてもんだ。鶴松がどんな女を好きか、そんなことはわかりやしねえよ。おれは千里眼じゃねえからな。まあ、嫌っているように見えねえ。そりやそうだろう、気に入らない女を仲間に引き入れたりするか？ あんたもあんただ、愚痴ぐち愚痴言つてねえで、正面から聞きゃあいいじゃねえか。あたしをお嫁さんにしてくれませんかって」

そんなこと聞けるわけないだろ、とお葉が怖い顔になった。

「それじゃ、あたしばかり下風に立つことになっちまう。それと七代目、百回言ってるけど、あんたって呼ぶのは止めとくれ。あたしにはお葉って名前があるんだ」

すまんねえ、と團十郎は片手で拝むようにした。

「それにしても、あいつは何を考えてるんだ？ おれにはさっぱり

わからねえ。鳥居の野郎はイカサマを使うと言ってたが、それは、お葉さんも聞いてるよな？　だが、六万枚の富札の中からたった一枚の留札とめ札を当てるなんて、誰にもできやしねえよ。留札の番号がわからなけりや、イカサマも何もねえだろう」

あたしたちと同じ手を使うんじゃないかって思うの、とお葉が言った。

「だって、湯島千両富の当たり札を奉行所に知らせるのは、鳥居の手下の目明かしなんだろ？　何番が出ましたって言えば、客はそれを信じるしかないじゃないか。それなら、鳥居が決めた番号を留札にすることもできるはずだよね」

あり得ねえな、と團十郎は首を振った。

「その日はそれで済むかもしれねえ。お奉行様が留札を当てました、だから褒美金と取り置いてる百万両は鳥居様のものになると言われりや、客も納得するしかねえからな。だが、湯島千両富は師走晦日みそかの大興行だ。日暮れまでには、瓦版屋が辻に立って当たり籤の番号を大声で叫ぶだろうし、瓦版そのものも飛ぶように売れる。もちろん、鳥居の陰富に加わっている客たちだって買うさ。留札の番号が違っていたら、誰でも鳥居のイカサマに気づく。その後どうなるか、考えなくたってわかるだろう」

そうだよねえ、とお葉がうなずいた。その辺りのことは考えてい

たようである。

「だけど、他にどうすると？ 算盤そろばんは苦手だけど、何百枚陰富札を買ったって、留札を当てることのできないのは、あたしだってわかるよ。陰富札は一枚百両で売るんだろ？ 十枚で千両、百枚で一万両だよ？ いくら町奉行だって言っても、所詮旗本なんだから、際限なく金子きんすが使えるわけでもないし、取り置いている百万両に手をつけるわけにもいかないだろうし」

鳥居がそんなことをするはずがねえ、と團十郎は消えていた煙管を懐に入れた。七代目、という鶴松の叫び声が聞こえたのはその時である。

転がるように表に出てきた鶴松が、右手に一冊の古書を掴んでいた。

「思っていた通りです。それにしても大胆な……」

「何のことだ？」

あの男の手口です、と声を低くした鶴松が周りに目を向けて、中に戻りましょうと囁ささやいた。

「壁に耳あり障子に目あり。ここのところ、妙な気配が漂っています。用心するに越したことはありません」

まったくだ、と團十郎は鶴松の背中を押して長屋の土間に入った。心配そうな顔をしたお葉が辺りを見回している。

「いったいどうした？ 手口ってのは、鳥居のイカサマのことか？」
そうです、と鶴松が手にしていた古書を差し出した。何だこいつは、と團十郎は恐る恐る手を伸ばした。

「汚ねえ本だな。帳子競艶？ 和本じゃねえな、唐本か？」

唐本とは中国の古書全般を指す。そういうことになります、と鶴松が慎重な手つきで頁をめくった。

「これは周の頃、春秋時代の写本ですから、二千年ほど昔の本です。当時あった咎や罪人、それをどう裁いたかを編んだ草紙と考えると、わかりやすいかもしれません」

「それがどうした？」

「前から当たりをつけていたのですが、何しろすべて漢文なのでなかなか読み進められなくて……それにしても、鳥居という男の賢さには舌を巻くしかありません。あの男がこの古書を読んでいたとは思えませんから、自分で考えついた手口なのでしょう。なるほど、確かにこれならイカサマもうまくいくはずです」

おめえは何でも一人飲み込みをする悪い癖がある、と團十郎は言った。

「それじゃあ、何のことだかさっぱりわからねえ。わかるように話してくれ。焦ることあねえ。晦日までまだ刻はたつぷりあるんだ」

筵戸が開いて、談志が顔を覗かせた。ちようどいい、と團十郎は

席を空けた。

「師匠、座ってくれ。鶴松が鳥居のイカサマを見破ったと——」

声がでけえよ、と談志が黻しむだらけの口元に太い指を当てた。

「三日ほど前から、この長屋の周りを知らねえ顔がうろつくようになった。人相占いじゃねえが、ろくなもんじゃねえのはすぐわかったさ。調べてみたんだが、下っ引きのようだ」

「下っ引き？」

静かにしろって、と談志が團十郎の口を塞いだ。

「目明かしどもが使っている連中だよ。目明かしだつてまともじゃねえが、下の下の下っ引きつて奴だ。探りを入れていたが、たった今、蛭仁の面つらを見た。野郎が出張つてるつてこたあ、おいらたちが目をつけられてるのは間違いいねえ」

蛭仁の狙いはわかってるだろ、と言った談志に、わたしですね、と鶴松がうなずいた。

「鳥居は聡さとしい男です。わたしが何か企せんでいると気づいたのでしよう。事と次第によつては、捕縛とらして牢ろうにたたき込む。そのつもりかもしれません」

他人事ひとことみたいない言い方は止としとくれ、とお葉が不安ふあそうな表情へいしを浮かべた。

「どうするんだい、ここにいたら捕とまっちゃうのかい？ だけど、

あたしらは何もしていないじゃない。そうでしょ？」

罪を犯した者を捕らえることだけが奉行の役目ではありません、と鶴松が小さく息を吐いた。

「罪を犯す前に取り押さえることが必要な時もあるでしょう。いずれは気づかれると思っていましたが、これほど早いとは……敵ながら天晴れあっぱとしか言いようがありません。さて、どうするかな」

落ち着いてる場合か、と團十郎は土間にあった風呂敷を広げて、着替えを詰めろとお葉に命じた。

「逃げるんだ、ここにいちやまずい。深川ふかがわに成田不動なりたふどうの出開帳が開かれることで有名な栄大寺えいだいじって寺がある。成田不動ってのは——」

成田山新勝寺しんしょうじ、と鶴松が微笑んだ。

「市川家いちかわと親交が深いのは、江戸市中の者なら誰でも知ってますよ。七代目が間に入れば、栄大寺もわたしたちを匿かくまってくれるでしょうが、そうはいきません。そもそも、七代目には大事な役目があります。寛永寺かんえいじの僧ほうりょう、法良ほうりょうに成り代わって、鳥居の陰富に賭け手として加わるという大仕事かね」

「そうは言うが……」

わたしたちが隠れて、七代目だけを危ない目に遭わせることはできません、と鶴松が明るい声で笑った。

「それに、整えなければならぬ準備がまだ残っています。鳥居の

イカサマの手口がわかった今、ようやくすべてを始めることができるんです」

「悠長なことを言ってるが、蛭仁なり、他の目明かしなり、与力や同心がこの長屋へ踏み込んできたらどうする？ おめえが捕まっちゃったら、一巻の終わりじゃねえか」

いくら鳥居でも、そこまでの無茶はできませんと鶴松が首を振った。

「何もしていなくても捕縛はできますが、いくら叩いても埃ほこりのひとつも出ないのでは、どうにもなりません。今、鳥居がわたしを見張っているのは、何をしようとしているのか確かめるためです。目的がわかれば、対処もできますからね。少なくとも、今日明日中にこの長屋へ踏み込むということはないでしょう。まだ刻はあります。逃げるにせよ隠れるにせよ、慌てる必要はありません」

そうは思えねえな、と團十郎は舌打ちをした。

「おめえだって、鳥居の性根がねじ曲がってるのはわかってるはずだ。あいつは金のためなら何をするかわからねえ。町奉行の権限でおめえを取っ捕まえて、奉行所なり伝馬町でんまちょうの牢なりにぶち込むこともできるし、裏から手を回して牢名主ろうなぬしにおめえを殺させるかもしれない。わかってるのか？」

伝馬町の牢に送ることはできません、と鶴松が腕を組んだ。

「あそこに行くのは刑が決まった者だけですし、鳥居としても目の届く場所にわたしを置いて吟味ぎんみしたいはずです。とにかく、その話は後にしましょう。今は鳥居のイカサマについて説明するのが先です」

奴はどうするつもりなんだいと尋ねた談志に、古書の頁を開いた鶴松が、陰富札の総替そうがえですと深くうなずいた。
お茶でもいれようかね、とお葉が腰を上げた。

九

なかなか面白い本でしてね、と鶴松が黄ばんだ頁をゆっくりとめくった。

漢字だらけじゃねえか、と談志が顔をしかめたが、人の殺め方、泥棒の手口、偽金造り、あらゆる事例が事細かく載っています、と鶴松が先を続けた。

「その中に、博奕ばくちについての章があるんです。というより、イカサマのやり方ですね。博奕は大昔からあったわけですが、イカサマも同じだということがよくわかります」

鳥居はどんな手を使うつもりなんだと尋ねた團十郎に、総替ノ法ですと鶴松が答えた。

「簡単に言えばこうです。今回の湯島千両富で、鳥居は六万枚の陰富札を用意しなければなりません。客はあらかじめ決めていた番号か、もしくはその六万枚の中から選んだ番号の札を買うこととなります」

「それで？」

この本によれば、と鶴松が漢字で埋め尽くされている頁の一行を指した。

「同じ陰富札をもう一組作っておく、とあります。そして、それを他の場所に隠しておく……今回、怪しまれないように、鳥居も百枚近い陰富札を買うでしょうが、それは他の客をだますための策に過ぎません。買った陰富札を手に、陰富の賭場に出ることが重要なです」

よくわからねえ、と首を捻った談志に、ここが面白いところでしてね、と鶴松が身を乗り出した。

「当たり札の番号がわかったところで、自分が持っている札と、別に隠しているもう一組の陰富札の中にある当たり籤を総替えするのです。当然ですが、手を貸す者がいなければなりませんし、ある種の手妻てづま（手品）ですから、素早く事を終えなければなりません。ですが、鳥居の陰富が開帳されるのは南町奉行所ですし、手下もいます。それほど難しいとは思えません」

そう言われてもなあ、と團十郎は首を傾げた。

「鳥居の陰富の場には、おれも含めて十人の賭け手がいる。見張ってるわけじゃねえが、どうしたって互いのことが気になるさ。万が一にもイカサマを使われたら、百万両が水の泡になっちゃうんだからな。鳥居だけを見ているわけじゃないにしても、十人、二十の目玉がある。奴が手妻を使うなんて話は聞いたことがねえ。そんなふうまくいくかね」

七代目は支度部屋に入っていますから、いちいち説明する必要はないでしょうが、と鶴松が薄い古紙に大きな四角形を描いた。

「わたしの養父は町奉行でしたから、敷地内にある屋敷で暮らしていました。わたし自身も、中の様子はよく知っています。支度部屋は二つありますが、実際にはひとつの大きな部屋を襖ふすまで二つに仕切っているだけなんです」

そうだったかなと言った團十郎に、簡単に言えばこうです、と鶴松が四角形の真ん中に一本の太い線を引いた。

「その襖を背に、鳥居は座るでしょう。理由は何とでもつけられます。もうひとつの支度部屋には、六万枚の陰富札が順番に並べられているはずですよ。そこには七代目が見た五人の目明かしの一人が控えています」

見てきたように言うじゃねえかと笑った團十郎に、他に考えられ

ませんと鶴松が笑みを返した。

「今回の湯島千両富では、万の位から順に富札が突かれます。そのたびに、おはなし屋役の目明かしが湯島から奉公所へと走ることになりますが、万の位がわかった段階で、六万枚のうち五万枚は用無しになります。少なくとも、留札になることはあり得ません。この辺りの理屈はわかりますか？」

筋はわかるよ、と談志がうなずいた。

「頭が松なら、他の竹、梅、福、禄、寿は留札になりっこないからね」

さすが師匠はわかりが早い、と鶴松が紙に「松」と書いた。

「もうひとつの支度部屋にいる鳥居の手下は、松の段だけを見ていればいいことになります。その後、千の位、百の位と番号がわかるにつれ、外れ札が増えていきますが、それは捨て置くだけの話です。残っているのは十の位で、そこまでわかればもう考える必要すらありません。最後の一の位が何であれ、目明かしの前に残っているのは、十枚の陰富札だけです。それを鳥居が持っている札と総替えすれば、褒美金と取り置きの百万両を手に行うことができるというわけです」

「どうやってやるっていうんだ」くどいようだが、鳥居は手妻使いじゃねえんだぞ、と團十郎は言った。「賭け手たちが見ている前で、

「どうやって総替えする？」

鳥居は襖を背に座っているんです、と鶴松が言った。

「手を後ろに回せば、握りこんでいる陰富札と、留札の番号が記されている十枚の陰富札を、控えている目明かしが取り替えてくれます。陰富札は薄い紙片ですから、襖を大きく開く必要ありません。襖そのものに、何らかの細工をしているのかもしれませんがね。何しろ、陰富開帳の場は南町奉行所です。鳥居にとっては自分の庭も同然。どんなことだってできますよ」

それが総替ノ法かい、と感心したように談志がうなずいた。

「なるほど、よく考えたものだ。それなら確実に大当たりの留札を引くことができるだろうよ……しかし鶴松さん、ちいっとばっかしまずいことがあるんじゃないのかい？」

「そうだよ、とお葉が四つの茶碗に茶を注いだ。」

「あ、ん、た、の、か、ら、く、り、だ、と、鳥居の目明かしたちを足止めして、偽の当たり札の番号を南町奉行所に知らせるんだろ？」

「そうです、と鶴松がうなずいた。その留札の籤は七代目が持っている、とお葉が團十郎に顔を向けた。」

「でも、鳥居は鳥居で六万枚のもう一組の陰富札の中から、同じ番号の陰富札を選ぶことができる。それじゃ、二人とも留札を持っていて、つまり当たり籤が二枚あるってことになるんじゃないのか

「さ。」

そこが難しいところです、と鶴松が顎を撫でた。

「その解は、この本に書いてありません。調べてみたところ、続きの巻があつて、しようい かいえん尚意怪艶という書名のようです。そこには、相手の仕掛けたイカサマを打ち破る方法が載っているということですが……」

どこにその本があるんだい、と談志が左右に目をやった。入手できていません、と鶴松が額を指で押さえた。

「さが捜していましたが、江戸市中にはありませんでした。京都の古本商が持っている噂で聞き、言い値で買うと使いの者を出しましたが、間に合うかどうか……」

仮にだぜ、と團十郎は湯呑みに手を掛けた。

「その何とかいう本が手に入らなかったらどうなる？ あるいは、鳥居のイカサマ破りの法が書いてなかったら？ 前にも言ったが、陰富の場に出るのはおれだ。おれと鳥居が同じ番号の当たり籤を持つていたら、どうすりゃいい？」

陰富札を作っているのは鳥居です、と落ち着いた表情で鶴松が言った。

「何しろ六万枚です。それだけの数の札を、鳥居が一人で作ることはいけません。例の五人の目明かしたちが、番号を書いたのでしょ

う。書き損じ、書き間違い、番号の抜けや漏れがあってもおかしくありません。七代目にはそれを言い立ててもらいます。最悪でも、百万両と褒美金は半分ずつの取り分になるでしょう。陰富札に間違いがあった場合、それは胴元の責任ですから、強弁すればすべて支払うということになるかもしれません。七代目ほど弁舌が巧みなら、説き伏せることもできるのでは？」

頼りねえな、と湯呑みを抱えたまま團十郎は胡座をかいた。

「そんなにうまくいくはずがねえ。確かに、おれはこれでも役者だから、口上は達者だよ。だがな、いつもの調子でべらべら喋ってたら、おれが七代目市川團十郎だとバレちまうよ。役者と坊主の喋りは違うからな。説き伏せるより、偽坊主のおれを鳥居の手下どもが殺す方が先だ」

そうかもしれませんが、と鶴松が顔をしかめた。こいつは恐れ入谷の鬼子母神、と團十郎はそのまま両足を大きく開いた。

「おれが死んでも構わねえってか？ そいつは了見が違うだろう。そこまですて、義理の親父の敵を討ちたいのか？ 百万両が欲しいのか？ それじゃ、おめえも鳥居と同じ金の亡者じゃねえか」

七代目に万一のことがあったら、その場でわたしは腹を切ると言っただけです、と鶴松が茶をひと口飲んだ。

「それに、わたしに養父の仇討ちのつもりはありませんし、百万両

を欲しいとも思っていない。人にはそれぞれ分際があります。わたしのような小人に、百万両は背負いきれませんよ。十両もあれば十分です。それで欲しい本が買えます」

いったい何がしたい、と團十郎は鶴松の目を見つめた。

「おめえは鳥居が金の亡者だと言ってたな？ 妖怪を殺すことはできねえが、その魂を奪うことはできると……奴の魂つてのは、つまり金だ。奴を素寒貧すかんびんにすることで、仇を討つと言っていたが、そうじゃねえのか？」

それを仇討ちというならその通りです、と鶴松が答えた。

「ですが、妖怪は鳥居一人ではない、とわたしは思っています。あの陰富に加わっている者たちも、幕府の役人も、広く言えばこの国に住む多くの者が妖怪になり果てています。金がすべて、自分さえ良ければそれでいいと考える者は、皆、妖怪の仲間ですよ」

「誰だって、金は欲しいだろう」

もちろん、と鶴松が傍らの本を取り上げた。

「ないよりもあつた方がいい。わたしだってそう思います。ですが、金がすべてだとか、金を手に入れるためなら何をしてもいい、と考えたことはありません。度が過ぎれば、人は金に動かされるようになります。それこそが妖怪の正体です」

このままでは富める者はますます富み、貧しい者はますます貧し

くなつていくでしょう、と鶴松が話を続けた。

「貧富の差が大きくなれば、生き辛くなりますよ。他人を騙したり、仕事の手を抜いたり、嘘をつくのが日常茶飯事になるでしょう。妖怪たちが考えるのは、いかにうまく下の者から金を吸い上げるか、それだけです。わたしに何ができるわけでもありませんが、そんな妖怪たちに一矢報いっしいたいと思つています。いや、もしかしたら、大妖怪の鳥居が金を失えばどうなるか、それが見ただけなのかもしれません。面白い見世物みせものになると思いませんか？」

見世物のためにおれが殺され、おめえも命を捨てることになるかもしれないねえ、と團十郎は湯呑みを畳に置いた。

「それでも構わねえと？」

その時はその時です、と鶴松が微笑んだ。どうもこいつは、と團十郎はつぶやいた。
とんだ世話物だ。まさか、こんな野郎と心中することになるとはな。

十

師走十五日、四ツ時（午前十時）、江戸城に登城し、老中頭土井利位つら他の老中たちに報告を済ませた鳥居は、寺社奉行、勘定奉行らと

湯島千両富について話し合った後、南町奉行所に戻った。

特に重要だったのは、寺社奉行との打ち合わせである。

例年、師走には犯罪が増えるが、特に多いのが火付け、そして何よりも^{すり}掏摸だった。

年末年始ともなると、江戸中の武士、町人が寺社へお参りに行く。

年末は年納めの厄払い、年初は初詣である。

江戸中の寺社にとってはまさに書き入れ時であり、当然人出も多くなる。掏摸にとっても、年末年始は稼ぎ時なのである。

その中でも、湯島千両富は最も規模が大きい催し物だった。例年、数万人が湯島天満宮へ厄払いのお参りを兼ねて詣でるが、今年は最後の千両富興行がある。

今までにない数の人出が見込まれ、混雑が予想された。どれだけ注意しても、掏摸の被害に遭う者が続出するだろう。

鳥居はそれを強く言い立て、本来なら寺社奉行の管轄である湯島天満宮内に、警備のため南町奉行所から与力、同心、岡っ引きを出動させることを了解させていた。

実のところ、五万とも十万とも言われている湯島天満宮の人出の中で、掏摸を見つけることなどできるはずもない。

鳥居の狙いは掏摸の捕縛ではなく、蛭の仁吉その他四人の目明かしを湯島天満宮の要所に配置することで、陰富の留札の番号をいち

早く知ることにあつた。

奉行所に入ると、与力、同心たちが書類仕事に精を出していた。その年に捕まった科人とがにんの吟味は年内に済ませるといふのが奉行所の慣例で、年末になると忙しくなるのは毎年のものである。

鳥居は科人の処分を裁可さいかする立場なので、書類仕事に加わることはない。励めよとだけ言つて、支度部屋に入った。

そこにいたのは猫屋の勝蔵かつぞうと弟の時蔵ときぞうだった。他の三人は小石川こいしかわの蝸牛長屋かたつむりに出向き、鳥居の指示で矢部鶴松の動向を窺うかがっている。手、手、手、と勝蔵が細い筆を握つたまま、震える右手を上げた。あと二千枚ほどでしょうか、と時蔵が言った。

「いつ終わる？」

鳥居の問いに、陰富札をすべて書き終えるのは明日中に何とか、と勝蔵が答えた。

「ですが、その後番号合わせをせねばなりません。何しろ六万枚が二組、計十二万枚ですから、むしろそちらの方が刻がかかるかと……」

明後日中に終わらせよ、と鋭い声で鳥居は命じた。

「既に賭け手の客たちから、陰富札購入の申し入れが来ている。本来なら、数日前に終えているはずだったが、鶴松を見張るために人数を割さかれたからな。予定より遅れたが、明日の夜には蝸牛長屋か

ら仁吉たちをこちらに戻す。五人で割り振れば、明後日中には終わるだろう。仁吉たちにも伝えておけ。ところで、五郎太はまだか？ 鶴松の様子を知らせるように言っておいたのだが」

合図でもあったかのように、支度部屋の襖が音もなく開いた。平伏していたのは、鳶とびの五郎太だった。

「待っていたぞ。鶴松について、何かわかったか？」
何もごさいやせん、と五郎太が顔を伏せたまま答えた。

「例の長屋を見張っておりやしたが、あの男はほとんど外へ出ることもなく、部屋に籠こもっているばかり。近づいて様子を探ろうとしたんでやすが、何しろ貧乏長屋で壁が薄すぎて……」

皮肉なものだ、と鳥居は唇の端だけを吊り上げて嗤わらった。ただ、妙なことがごさいやす、と五郎太が顔を上げた。

「先日の会合に来ていた寛永寺の若い坊主が、鶴松の長屋に出入りしておりやす。出入りというより、暮らしているようでありやした。いったいどういうことなのか、とんとわかりませぬが……」

あれは偽坊主だ、と鳥居が鼻で嗤った。

「まったく、この鳥居耀蔵も甘く見られたものよ。下手な芝居を打ちおって……わからなんだか、あれは七代目市川團十郎よ」

まさか、と三人の目明かしが顔を見合わせた。最初こそわからなかったが、と鳥居は口元を拭った。

「まさか市川團十郎が頭を剃りあげているとは思わなかったからな。だが、後で考えてみれば最初からあの男は様子がおかしかった。いつもは飢えた餓鬼がきのように膳ぜんのものを食い散らかすくせに、あの日だけはろくに箸をつけようとしなかった。七代目市川團十郎と寛永寺の僧、法良が瓜二つという話を聞いたことがあったのを思い出し、それですべてが繋がった」

あの野郎は江戸四十里所よじりどころ払はらはず、と時蔵が腰を上げた。

「どの面下つらげて江戸に戻ってきやがったんだ。今からでもふん縛つって、手鎖てくさりにしてやりますか」

止めておけ、と鳥居は首を振った。

「あんな役者風情は放っておいて構わぬ。問題は矢部鶴松よ。奴が何を企んでいるのか、そして團十郎と組んで何をするつもりなのか……それがわかるまでは、泳がせておけばよい」

それではこのままに致しやす、と五郎太が頭を下げた。

「鶴松については、まだ何もわかっておりやせんが、もうひとつお奉行様にお伝えしておきたいことがございやす。読本作家ためながしゆんの為永春水すいのことは、覚えてやすか？」

しばらく前に死んだはずだ、と鳥居が言った。

「下らぬものばかり書いていたからな。天罰というものだろう」

「では、娘がいたことは？」

知らぬと言った鳥居に、為永春水というのは父娘おやこの筆名だったよ
うでやす、と五郎太が声を潜めた。

「こいつは風の噂でやすが、父親の方は酷ひどい酒飲みで、手鎖の刑を
受けた後はろくに筆を執とることもできなかつたと……代わりに書
いていたのが娘のようでございやす。お葉という名ですが、その娘
も例の長屋に暮らしているようでやす」

なるほど、と鳥居はうなずいた。

「つまり、蝸牛長屋に鶴松をはじめ、この鳥居に恨みを持つ者が集
まっているということか。なかなか面白い。一人ずつ捕らえるより、
一網打尽の方が容易たやすいはず。より詳しく調べるのだ。さすれば、鶴
松の捕縛も簡単にできるであろう」

お得意の搦からめ手でございますか、と皮肉な笑みを浮かべた時蔵に、
武士の計略である、と鳥居は大きく胸を張って答えた。

十一

三日後、六万枚の陰富札を作り終えた鳥居は、賭け手の客たちに
それを伝え、その日のうちに百両で売り始めた。

実際には同じものをもう一組作っていたが、それは客たちに隠し
ている。

売り場は南町奉行所の支度部屋だった。本来、部外者は立ち入ることができないが、そこは泣く子も黙る町奉行である。鳥居自らが奉行所内に入ることを許可しているので、問題は何もなかった。

大名の江戸家老や旗本、御家人、富裕な商人や僧侶が家臣や手代てだいに千両箱をいくつも持たせて入ってきては、決めていた番号の籤、あるいはその場の勘で選んだ籤を購入していった。

金の管理は胴元を兼ねる鳥居の役目で、鳥居自身も大金を投じて陰富札を買っている。一度に多くの賭け手を集めるわけにはいかなので、日を置いて何度か続けていると、あつと言う間に師走二十九日になった。

その夕刻、鳥居は五人の目明かしを集め、鶴松の動きを確かめた。不審な様子はありません、と五人が口を揃えて答えた。

どうしたものか、と鳥居は黄色い歯に指を強く押し当てた。

鶴松を捕らえるのは簡単だが、不審な筋がない者を取り調べることは難しい。下手に手を出せば、奉行という立場に傷がつくだろう。

だが、湯島千両富は明後日に迫っている。そこで鶴松が何かを仕掛けてくるのは間違いない、と勘が告げていた。

法良に化けた七代目市川團十郎を、陰富の賭場に潜り込ませるつもりなのはわかっている。しかし、そこから先は見当もつかない。

團十郎は鶴松に従っているだけなのだろう。結局のところ、鶴松

の身柄を押さなければ、どうにもならない。

「……為永春水の娘が、同じ長屋に暮らしているということだったな」

そうでやす、と五郎太がうなずいた。そこが狙い目だ、と鳥居は五人の目明かしに策を授けた。

明日夕刻であると最後に念を押すと、五人が薄笑いを浮かべてうなずいた。

十二

師走というだけあって、年末の時の流れは常より早い。気がつけば、晦日の前日になっていた。

この間、團十郎は鶴松と共にさまざまな準備を進めていた。たとえば法良についてである。

既に法良は寛永寺住職に命じられて、一万両の大金を投じ、百枚の陰富札を購入していたが、晦日当日、法良の身柄を押さえ、所持している陰富札を奪わなければならない。その札の中から、留札の番号を決める必要があるためだ。

少々乱暴だが、寛永寺から南町奉行所へ向かう途中、法良と連れの小坊主を捕まえて、陰富札を取り上げた上で、近くの廢寺に閉じ

込めることにした。

今のところ、法良が何番の札を買ったかはわかっていないが、それはその時に調べればいい。

留札として一枚を選び、それを談志が差配さはいしているおはなし屋に伝える。その後の段取りは決まっていた。

法良を捕らえるのと同時に、身ぐるみを剥はいで、團十郎は法良の僧衣に着替えることになっていた。その方が露見しにくいだろう。

また、湯島千両富で突かれた富札の番号を知らせるため、南町奉行所へ向かう目明かしたちを足止めしなければならなかったが、これは談志とお葉がその役目を請け負っていた。そのために手を貸す者は咄家や読本作家、役者や女郎など百人近くいた。

あの手この手で足止めすることになっていたが、目明かしたちは渡世人とせいにん、無宿者むしゆくものの出である。口だけでは収まりがつかないかもしれない。

その時には鶴松が神道無念流の剣をふるい、目明かしたちを峰打みねうちちで倒し、簀巻すまきにして河原にでも転がしておけばいい。

「どうも心配だな」すべての手筈てはずを確かめ終えたところで、團十郎は三人の顔を順に見つめた。「うまく事が運ばいいんだが、すんなり行くとも思えねえ。嫌な感じがしやがる。背中がぞくぞくして、

たまらねえよ」

團十郎に武芸の心得はなかったが、舞台に立つ役者の多くがそうであるように、周りの些細な変化に体が反応することがある。今朝起きた時から、どこか不安があった。

おいらもだよ、と談志が着物の襟を立てた。

「七代目の言う通りだぜ。何日か前から、ここを見張っていた連中が一斉に姿を消しやがった。何を探ろうとしていたにせよ、諦めたのか、それとも別の狙いがあるのか……」

大丈夫だよ、とわざとらしく明るいい声でお葉が笑った。

「準備万端整ってるんだし、後は明日を待っただけさ。そうでしょ？ 男の人って、どうしてもそんなに気が弱いんだろうね。情けないっからありやしない」

足音が、と鶴松が片膝を立てた。暮れ六つ（午後六時）、冬の陽は西の空に沈んでいる。蝸牛長屋の周りは真っ暗だった。

何も聞こえねえぞと言った團十郎に、捕り方ですと鶴松が囁いた。

「一人か二人か、わたしたちがここにいますかどうか、確かめています……外へ出てください。幸い、今夜は新月。雲も厚く、星明かりもほとんどありません。うまくすれば、逃げることもできるでしょう」

「おれたちが何をしたっていうんだ。いくら鳥居でも、何もなければ無茶はできねえだろう」

あなたもあの男の恐ろしさはわかっているでしょう、と鶴松が背中を押した。

「何をしたか、していないか、そんなことは鳥居にとつてどうでもいいんです。罪状がなければでつち上げるだけです、それだけの力もあります。急ぎましょう、闇やみに紛まぎれて逃げます。集まるのは長命寺ちやうめいじ。いいですね？」

わかっている、とうなずいた談志が篋戸けいこを開けて外に出た。

何かあった時には蝸牛長屋こいづまを捨て、向島むかしまの長命寺に集まると前から決めてある。住職しゆくが談志だんしの碁友ごゆうで、碁ごを打ちにきたといえれば喜んで迎えてくれるだろう。

先に行くぜ、と團十郎は談志の後に続き、闇を透かすようにしながら歩を進めた。龕灯がんとうの光が辺りを照らしたのはその時である。

「為永春水の娘、お葉」

破れ太鼓のような大声に、團十郎は談志の肩を押さえて地に伏せた。蛭仁むしにだ、と談志がつぶやいた。

「そこにいるのはわかっておる。我らは南町奉行所の者せんぎ。詮議せんぎしたき筋あり、おとなしく出てこい。お上にも慈悲じひはある。話を聞くだけだ、怯おそえることはない」

下くだがれ、と團十郎は談志の腕を引いた。気づくと龕灯の光は十ほどあり、その他に捕り方の数は二十人を越えているようである。

龕灯は別名強盜提灯ちようちんとも呼ばれ、目明かしが犯人探索の際に使う道具だが、今もそうだった。

「お葉、お前が父春水の代わりに人情本を書いていたことは承知しておる。筆名こそ為永春水だったが、実際に筆を執っていたのはお前だな？　そうであるならお前も科人。風紀紊乱びんらんのため、手鎖になるやもしれぬが、それは詳しい話を聞いてからのこと。もう一度言う。そこにいるのはわかっておる。おとなしく出てくればよし、逃げ隠れすれば、罪は重くなるばかり。道理がわからぬほど、愚かではあるまい」

何が悪いんだい、と叫ぶ声があった。龕灯の光が蝸牛長屋の正面に集まり、そこにお葉が立っていた。

「お父つあんは病持やまいちだったんだ。人情本を書くのを手伝ったのは、親孝行つてもんだろ。そのどろがいけないのさ！」

影が差した。龕灯を手にした蛭仁が近づいていく。悪相の大男の姿に、お葉が怯えたように口を閉じた。

「殊勝しゆしやうな心掛けと言いたいところだが、そうもいかねえ」こっちへ来い、と蛭仁がお葉の細い手首を掴んだ。「ほお、こいつはなかなかの美人じゃねえか。何を震えてやがる、さっさとしやがれ。今から奉行所でとっぷり話を聞いてやる。お前が何をしていたのか、洗いざらい喋ってもらおうから……痛え！」

怒鳴った蛭仁に、触るんじゃないよ助平野郎、とお葉が叫んだ。

「あたしはね、そんなことをされて黙ってるような女じゃないんだ。引っ掻かかれたってしょうがないことをしたんだよ。どこへでも連れてきやいいさ。何も悪いことなんてしてないんだから——」

無言で蛭仁が右腕を振ると、頬を張られたお葉がその場に倒れ込んだ。

あの野郎、と立ち上がりかけた團十郎の腰に、談志が必死でしがみついた。

「出ちや駄目だ、七代目。あんたが捕まっちゃったら、何もかも終わっちゃう。法良になり替われるのは、あんたしかいねえんだよ」

「だけど、お葉さんが……」

ここは辛抱しんぼうするしかねえ、と談志が首を振った。

「おいらだって、あの腐れ外道をぶん殴ってやりたいよ。だけどさ、そうはいかない。お葉ちゃんには申し訳ねえけど、一日二日の我慢だ。人情本を書いていたぐらいで、今さら手鎖なんかになりやしねえ——」

いきなり蛭仁の巨体が吹っ飛んだ。現われた鶴松が木刀で喉元に突きを入れたのである。

それを待っていたように、二十人ほどの捕り方が鶴松を取り囲んだ。

「浪人、矢部鶴松だな？」

捕り方の一人が怒鳴った。落ち着いた表情で鶴松が木刀を左右に向けた。

「通りかかっただけの者ですが、南町奉行所の捕り方といえども、娘さんに手を出すのはどうでしょう。大の大人が二十人掛かりで捕らえようなど、恥ずかしいとは思いませぬか」

何を言う、と男たちが叫んだ。情けない、と鶴松が腰に手を当てて笑った。

「その者は目明かしと言っていましたひれっが、ご公儀ごこうぎの者がそのような卑劣な真似をするはずがありません。その辺の盗っ人か、それともヤクザ者でしょう。成敗したところで、罰は当たりますまい」

捕り方たちが一斉に襲いかかった。お葉を立たせた鶴松が、先頭の男の頭を木刀で殴りつけた。目にも止まらぬ速さである。

闇の中へ走っていくお葉の背中に目をやった鶴松が、気合だけで捕り方たちの足を止めていた。風さえも動かない。

馬鹿野郎、とふらつく足で立ち上がった蛭仁が吠えた。

「何をしてやがる、こいつを捕らえろ！ お上に刃向かう無法者だ。殺したって構わねえぞ！」

それだけ汚い口を叩くところを見ると、やはり地回りのヤクザ者、と鶴松が冷笑を浮かべた。

「確かにわたしは浪人の身だが、神道無念流ではそれなりに知られた腕。お主たちのような者では相手にならぬ。命が惜しければ、すぐ从这里立ち去るがいい」

木刀を捨て、真剣を抜いた。薄い星明かりが刀身に当たり、光を放った。

「無法者を成敗するのに遠慮はせぬ。もう一度だけ言うが、死にたくなければ消えろ」

蛭仁が腰に手をやった。刀を持ってやがる、と談志がつぶやいた。

目明かしは正式な意味での武士ではない。あくまでも同心に雇われている身である。

そのため、帯刀たいとうは許されない。捕り物の際、武器として用いるのは主に十手じってである。

だが、他の捕り方たちも刀を抜いていた。蛭仁がお葉捕縛の指揮を執っていたが、与力や同心が目明かしの下につくことなどあり得ないから、捕り方たちも目明かしか下っ引きなのだろう。

にもかかわらず、全員が刀を持っているのは、鳥居の許可があればこそであった。

いかに読本作家が風紀を乱すといっても、お葉のような娘一人を捕らえるために、ここまでする必要はない。お葉捕縛は口実に過ぎず、最初から狙われていたのは鶴松だと團十郎にもわかった。

捕り方たちが刀を奮って襲いかかったが、鶴松は僅かに体を動かすだけである。だが、捕り方たちの刀が鶴松に触れることはなかった。

腕が違うぜ、と見惚れたように談志がつぶやいた。

素早く鶴松が左右に刀を振ると、薄闇の中に火花が飛び散った。顔さえ向けないまま、右の拳こぶしを突き出すと、顔を殴られた捕り方が悲鳴を上げて倒れ込んだ。

そのまま鶴松が二人の捕り方の鳩尾みぞおちを刀の柄で突き、更に続けて三人の男の膝を正面から蹴った。

皿が割れたのか、男たちが呻うめき声をあげてうずくまった。一瞬で五人の男を倒したことになる。

(こんなに強つええとは)

剣術修行をしていたのは聞いていたが、これほどの腕とは團十郎も思っていなかった。

いつも物静かに本を読んでいるだけの鶴松が、右へ左へと牛若丸のように身軽に場所を変えながら、男たちを倒していく。これが鶴松の真の姿なのだろう。

「刀を捨てやがれ！」

蛭仁の怒鳴り声が出た。右手を逆手にねじ上げられたお葉が悲鳴を上げている。捕まっちゃまったのか、と團十郎は天を仰いだ。

それは鶴松も同じだった。龕灯の光に照らされた顔が、みるみる色を失っていく。

「お葉さんを離せ。さすれば、わたしもおとなしくお縄につく」

そつちが先だと叫んだ蛭仁に、大きく息を吐いた鶴松が刀を放った。捕り方たちが一斉に鶴松の体を地面に押さえ付け、縄で縛った。

おめえなんぞに用はねえ、と蛭仁がお葉の体を突き離れた。

「矢部鶴松、よくもこの蛭仁の面に傷をつけてくれたな。この恨み、忘れねえぞ……おい、何をぼんやりしてやがる。そいつを引っ立てろ。奉行所へ連れていくんだ」

おう、と声を揃えた捕り方たちが、両腕両足を縛り上げた鶴松の体を持ち上げ、太い木に吊り下げた。まるで獵師に捕らえられた獣のようである。

七ノ字、と鶴松が叫んだ。

「後は任せた。頼んだぞ」

黙ってる、と蛭仁が鶴松の腹に当て身を食らわせた。急所に入ったのか、鶴松が動かなくなった。

どうすると囁いた團十郎に、とにかく長命寺へ、と談志が絞り出すような声で言った。

七ノ字、とは七代目を意味している。後事はすべて團十郎に任せるといふことなのだろうが、いったいどうしていいのか、皆目見当

がつかなかった。

蛭仁を先頭に歩きだした捕り方たちの姿が見えなくなった。何も考えられないまま、團十郎は談志の後を追って駆け出した。

(つづく)